一人ひとりの死生観と健康自律を支える超高齢社会の創生

Creation of a Super-aging Society that Encourages Respect for Individual Views on an End-of-life Good and Honorable Death and Supporting Personal Autonomy in Health Care

研究代表者 佐藤眞一（人間科学研究科 教授）

研究協力者
［学内］土岐博（名誉教授・理論核物理学） 山川みやえ（医学系研究科 准教授） 鈴木径一郎（共創機構 特任助教）
木多道宏（工学研究科 教授） 杉田美和（工学研究科 特任准教授） 桂結衣（文学研究科 博士後期課程） 瀬戸ひろえ（人間科学研究科 博士前期課程）
［学外］大庭輝（弘前大学大学院保健学研究科 准教授） 勝眞久美子（ななーる訪問看護ステーション管理者） 鎌田大啓（株式会社TRAPE 代表取締役社長）
庄瀬寛（特定非営利活動法人いきいきライフ協会 理事長） 苗村昌世（大阪府中央図書館 司書） 森賢二（社会福祉法人大阪府社会福祉事業団 職員）

共同研究機関・連携機関
吹田市（福祉部・健康医療部） 豊中市（福祉部） 箕面市（健康福祉部） 一般社団法人福祉住環境アソシエーション 社会福祉法人大阪府社会福祉事業団

1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、大阪大学の自然科学、社会科学、人文学の各分野の研究者が、地域で超高齢社会の課題に取り組む個人や団体、大阪府や豊中市、箕面市、吹田市などの近隣自治体、さらには奈良県内や兵庫県内の自治体をも含む広範囲に及ぶ協力体制のもとに、これまでに種々の社会実装可能な成果を公開するとともに、さまざまな社会実践活動をしてきました。プロジェクト3年目の最終年を迎えるに当たって「生と死と、命と：社会実装と社会実践」と題するシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、大阪大学EDGEプログラムによる私たちメンバーの2015年に始まる活動から、それを継承してきたSSI基幹プロジェクトとしての活動を総括し、その成果を社会に問いました。新型コロナ感染症の影響のため、会場参加者は極力少なくしたうえで、リモート配信を行い、多数の方々にご覧いただきました。7年間にわたる私たちの活動の成果を踏まえて、今後は政策提言につながるような進展を目指したいと考えています。

2021年12月13日（火）開催シンポジウムタイトルとメンバー

2. 2021年の取組と成果

❶シンポジウムの開催

2021年12月に「生と死と、命と：社会実装と社会実践」と題して、これまでのプロジェクトの成果の一部を個別発表形式で行い、それを踏まえたディスカッションを、会場の参加者とともに学内メンバー、学外協力者、および大学院生が行いました。発表内容は以下に示す個別活動報告と重なりますので、ここでは割愛します。ディスカッションでは、社会実装や社会実践を行う際にも、地域に暮らす人々それぞれの個性を含む多様性を常に考えながら進めていくことの重要性が強調されました。なお、大阪大学会館での会場参加とともに、オンラインのハイブリッド形式で行ったため、多くの参加者を得ることができました。

❷人工知能（AI）を用いた個人と社会の健康自律アプリの開発と実装

大阪府の国民健康保険の健診データを用いて、生活習慣病（糖尿病、脂質異常症、高血圧）の3年以内の発症確率を予測するAIが完成しました。2021年12月16日より大阪府が運営する健康スマホアプリの「アスマイル」に搭載し、大阪府民による運用が始まりました。個人が自律的に病気発症を抑える努力を引き出します。

❸認知症の人にやさしい診断・ケア用ツールCANDyの開発と実装

知能検査方式の認知症スクリーニング検査の臨床上の問題点を克服するために、日常会話の特徴に基づい

て認知機能の状態を把握する新しい方式の検査CANDyのマニュアルを刷新するとともに、看護師向けのテキストを出版しました。CANDyは、従来は介護場面での使用を前提としていましたが、新たに看護師向けの会話マニュアルも作成して日本看護協会出版会より「認知症Plusコミュニケーション」を刊行し、認知症の人とのコミュニケーションについて広い視点から解説しました。

認知症Plusコミュニケーション

「もかの家」と「柴原モカメゾン」

❹図書館と認知症

今年は、これまでの図書館活動を社会実装に向けて広げていく活動を開始しました。まず、奈良県三宅町の複合施設MiiMoにおいて、図書スペースを有効利用するためのキャプション評価を町民とともに行いました。これはアクションリサーチ法を用いた京都橘大学作業療法学科との共同研究です。さらに超高齢社会での自分史執筆の可能性について大阪大学文学研究科の安岡健一氏によるフォーラムを開催し、今後は自分史執筆を図書館で実施する意味を探る予定です。

❺哲学カフェ

兵庫県たつの市下沖地区自治会でリモートによる地域住民による対話の場を継続的に開催し、映像メディアを介した住民同士のインタビューなども交えて哲学対話を実施しました。また、新たに大阪府堺市立西区図書館では「子ども哲学カフェ」に取り組みました。豊中市など近隣自治体での対面での哲学対話も緊急事態宣言解除後、少しずつ再開しました。

**❻ホスピスおよび高齢者向け住宅における
モンテッソーリケアの推進**

2021年4月にモンテッソーリケアの実践の場として、ホスピス「もかの家」とサービス付き高齢者向け住宅「柴原モカメゾン」が竣工しました。オーストラリアの専門コンサルタントAnne Kelly氏をお招きし、毎月、同時通訳付きで勉強会を開催しています。今後は、モンテッソーリケアワーカーの養成コースを実施する予定です。

**❼地域コミュニティの活性化：
千里ニュータウンでの実践**

地元自治体等と協力し、千里ニュータウン近隣センター再生の取組を進めています。市民、テナント、地権者へのヒアリングを進めるとともに、空室や外部空間を利用して、親子のグループを対象に家具、立体地図、秘密基地づくりなどのワークショップを実施しました。長期的には市民、企業、大学などの出資による特別目的会社を設立し、福祉・医療の機能を導入しながら、コミュニティの中心としての役割を再構築することを目指しています。

❽地域人材の養成

地域人材の養成に向けて、哲学カフェのファシリテーター育成に必要な調査研究を継続しました。今年度は特に、哲学カフェの場や運営過程において生じる倫理的問題にファシリテーターとしていかに対応しうるかという観点で、事例検討に関する文献研究を行いました。また、この文献調査を基に、有志の実践者の協力を得て、哲学カフェに関する事例検討方法で試行・検討する会を主催し、今後の実装を目指しています。

3. プロジェクトの今後

本プロジェクトは本年度で終了しますが、ヒューマニティとサイエンスを融合した「生と死と、命」に関わる学術的成果を社会実装し、社会実践することができました。今後は、これらの成果を政策提言が行えるような普遍的な価値に高めたいと考えています。また、これまでのプロジェクトの道程の中で、成熟した超高齢社会を創生するためには芸術的な人間的価値を見つめることも必要であると考えるようになりました。ヒューマニティとサイエンスに加えてアートを融合したプロジェクトに発展させたいと考えています。